

1. 意味と理性における身体的重要性
2. 意味と合理性にかんする客観主義的理論

(1) 客観主義的な意味論

意味とは、記号表象と客観的な現実との関係；記号は客観的に存在する事物、特性、関係と対応する能力をもつ

概念とは、一般的な心的表象、あるいは論理的存在者；同一性、一般性

概念は、身体性を欠く点においてイメージ（心像）と対比される

意味理論の仕事は、任意の記号列の有意味性を説明すること；意味の要素である小さな単位の命題の真偽条件から、どのようにしてより大きな単位の命題の真偽条件が導き出せるかを示す「帰納的理論」を作る

最終的な意味の分析単位は基本概念であり、隠喩的なものや比喩的なものであってはならない；基本的概念は固定した対象、特性、関係性を写像するものでなければならない（＜客観主義＞に基づく制約）

意味の＜客観主義的＞理論は、意味を記号と客観的な事態との関係として扱う；人間の「主観的」な認知を超えた（「神の眼」による）「客観的」意味、概念、論理的結合を追及することが可能であり哲学者の仕事、対する人間の概念把握は主観的な認知の働きの問題であり、それを追及するのは心理学の仕事

(2) 合理性にかんする客観主義的見解

推理とは、記号と記号とを規則に従って結合する操作

合理性を支えるのは形式論理

合理性は、純粹で抽象的な論理的关系、操作によって得られるもので、推論を行う人間の主観的過程とは独立

超越的合理性という観念も、知識が「神の眼」で見た世界に関するものだという考え方を支えている；理性は、推理を行う主体とは独立に、あらゆる時代、あらゆる場所に存在するもの；アプリアリな真理を主張するためにはこうした合理性の本質的で固定的な構造が必要とされる

3. 客観主義の哲学的文脈

意味と合理性にかんする＜客観主義＞は西欧の哲学的伝統から、どのように生じたのか；「認知的、概念的、形式的、理性的」vs.「身体的、知覚的、実質的、情動的」という二分法による分裂；デカルト主義、カント主義という二つの哲学が決定的な役割を果たした。デカルト：確実な知識を定めるための基礎は「方法」の整備にあり、それを保証する一般的な「数学的方法」である（『方法序説』）；世界は精神と物質（身体）からなる、人間は精神的（理性的）活動に従事できることを内省によって知ることができる、

そのことが、人間が理性的存在であることの証である（「我思う、故に我あり」）。

精神と身体との間に生じた裂け目：両者が全く異なる存在である（存在論的裂け目）とすれば、それらの間に架橋し、繋ぐ方法を見つけなければならない。確実な知識を知る方法（「普遍数学」）は観念の間の可能なすべての結合を秩序立った仕方ですべてに確かめられる；しかし、観念が外部の現実を精確に代表していることをどうやって確かめられるのか？神学的説明；「神は人を欺かない」。

カント：デカルトが直面した問題を回避する試み；認識能力の二つの成分、実質的成分＝身体的、形式的成分＝理性的なもの、を区別した。概念が客観的実在に対応することをどのように知ることができるか？事物をそのもの自体として（「物自体」）は知りえない、意識（先験的カテゴリー）によって濾過され、構造化されたもののみ知りうる；理性は身体を超越している、理性は自律的であり、身体的規定から独立であるとして、この問題を回避した。

#### 4．最近の意味理論における客観主義的テーマ

##### (1) フレーゲ

意義（Sinn）と意味（Bedeutung）の区別；意味＝公共的で普遍的な観念、意義＝特定の文脈における対象の指示。

存在論的に三つの領域を区別する；（ ）物理的領域、（ ）心的領域、（ ）思考の領域（ ）の領域は、数学、論理学の普遍性を保証するために必要。

##### (2) モデル理論的意味論

抽象的記号がどのようにして意味をもつようになるか？記号は、あるモデルの要素との対応によって有意味となる。

##### (3) 状況意味論

文は状況の類型と結びつくことによって意味を獲得する；意味は、文と客観的実在との客観的關係にかかわる；状況は主体の理解過程とはかかわらない。

意味は＜客観主義＞で言われる概念的なものとして扱われる；

#### 5．デイヴィドソンの意味論

習得可能な言語の意味の理論としてタルスキの真理論を採用；文を解釈するのに、どのような解釈の「理論」を手に入れられるかを説明するためにタルスキを用いる；タルスキは複文の真理値を、単文の真理値を公理として、真理条件である定理から導き出すことによって、あらゆる文の真理値を確定できるということを、人工言語で示した；デイヴィドソンは、自然言語にタルスキの考え方を逆転させて適用した；言語を理解できる者は、言語を解釈するための理論をもっているが、この理論は、個々の要素的述語や論理的結合子などの使用法を規定するための、真理条件に関する有限個の公理からなるものとして再構成できる。

#### 6．身体を心に返す 手続き

イメージ図式の経験的構造、比喩的洗練、理解の抽象的領域への投射などを現象学的に

記述することに基づいて、人間的意味と合理性について豊かな説明が可能となる；意味と合理性が想像力によって構造化された身体経験に結びつけられる様式を記述し、身体が心の中にある様式を探る。

## 7. 合理性の問題

客観主義者が合理性から想像力を排除する理由

）想像力は身体と強く結びつき過ぎていて、個人に特異なものであり過ぎる。〈プラトン主義的〉理解

）想像力は空想的であまりに制約がなく、恣意的であるから、合理性の条件である規則性とは相容れない。〈ロマン主義的〉理解

中心となる問題：身体化されたイメージ図式と理解の隠喩的体系は十分に広く共有されたものか、それとも、主観的で構造を欠いたものか？

客観主義者の論点 = 理性と想像力の融合が行き着く先は相対主義しかない。想像力がもたらす表象が普遍的な性格をもつことを立証する方法はない。

客観主義者がかうして用いる方法は想像力の働きを支配するアルゴリズムを証明すること。しかし、隠喩はアルゴリズム的ではなく、実在を直接写像する命題の集合に還元できない。

したがって、客観主義の立場に立つ限り想像力の構造は合理性の論理的構造にとって不可欠な部分とはなりえないことになる。

想像力は新しい観念や結合が生み出される「発見の文脈」では一定の役割を認められるが、論理的結合のための「正当化の文脈」においては排除される。

想像力が意味と合理性において中心的役割を果たすことを認めながら、なおかつそれが相対主義に陥らないために何が必要か。

イメージ図式は公共的で客観的な性質を持ちうる。理由は、それが、人間がもつ身体化された理解に備わる繰り返し立ち現れる構造であるから。イメージ図式は関連し合った意味のネットワークの構造を形づくり、抽象的な推理がもつ推論構造を生じさせる。

ここで問うべきことは、人間の理解と合理性が想像的で身体化された性格をもち、しかもそれらが還元不可能である時、知識と客観性は如何にして可能か？

〈客観主義〉と〈相対主義〉の間に広大な中間地帯があるという考えは、この十年間にトマス・クーン、ヒラリー・パットナム、リチャード・ローティ（『哲学の脱構築』）、リチャード・バーンスタイン（『科学・解釈学・実践』）、ハロルド・ブラウンらの哲学者によって重視されてきた。

リチャード・ローティは『哲学と自然の鏡』の中で、客観主義がデカルトによる確実な知識を得る方法（『方法序説』）からカントのあらゆる形式の判断は理性によって批判するという信念を経て、与えられた認知活動あるいは探求の様態の「論理」ないし「文法」を明確に記述しようとする分析哲学の試みによって 20 世紀まで温存されてきたと論じた。ここでの客観主義とは価値中立的で普遍的な合理性の枠組が存在するという主張である。

客観主義に対して、人間の合理性が生み出すものを評価する中立的で普遍的な枠組など存在しないという批判は、容易に相対主義に陥る危険性をもつ。相対主義とは哲学者が基礎的と見なす概念 - 合理性、真理、実在、知識、善、正しさ等の概念 - は全て特定の概念図式、理論的枠組み、パラダイム、生活形式、社会、文化に相対的なものとして理解されるべきだと考える見方である。

一般にこの相対主義に対する強い警戒感と嫌悪感がある。相対主義はあらゆる确实性の基準を覆し、科学の進歩を否定し、人間の知性を蹂躪するものとさえ見られるからである。したがって、いくら客観主義の欠陥を指摘されても、そこから相対主義の亡霊が彷徨出る危険性がある限り、客観主義を捨てる選択肢は容易に選ばれない。むしろ、より精妙で洗練された形の客観主義が工夫される傾向がある。それが論理、科学、哲学、道徳、政治、社会理論を基礎づける新しい方法の案出である。

二十世紀に合理性の本質をめぐる論争は主に科学哲学の内部で行われてきた。この「科学の論理」の研究は<論理経験主義>という運動において最も顕著であった。

#### 8. 論理経験主義による客観主義擁護の失敗

<論理経験主義>は科学が合理的研究の最も高度な成果であるという仮定に基づいて、科学の合理性が如何なるものかを探求するという研究戦略を採った。

科学的知を他の知識から区別するものは、その知識を得る過程における論理的緻密さと経験的基礎であるとされる。なぜなら科学は客観的データに照らしてテストすることができるのに対して、形而上学や神学はテスト可能な知識を生み出せないからだとされる。

<論理経験主義>が直面した二つの課題は次のようなものである。

) 科学の合理性は数理論理学を使って分析しうることが示されること。

) 科学理論は、理論から独立した客観的な経験的データに基づいていること、また、それによってテストしうることを示されること。

しかし、<論理経験主義>はこのどちらの要請にも応えられなかった。(クーン、ファイヤアーベント、クワイン等々)

科学的説明の構造を如何なる論理形式にも還元できない。意味の検証主義的理論は、経験的意味を独立な観察データに結びつけることに失敗。それは単独の名辞水準、言明水準、言明群水準のあらゆるレベルにおいて失敗だった。クワインが科学全体という水準において辛うじて「理論の経験的基礎づけ」の存在を救い出した(ホーリズム)。

また、科学が経験的基礎をもつ故に観察データによってテストしうるという主張も批判され棄却された。すなわち理論負荷のない中立的なデータなどというものは存在しないことが明示された(決定実験の不可能性)。

#### 9. 客観主義的な指示理論

評価基準は歴史を通じて展開するものであるとするラジカルな相対主義に対して、新しい客観主義的な意味理論として言語が如何にして実在を正しく写像しうるかを説明する指示理論が新たに登場した。

知っているということは、外的対象が我々の概念のネットワークを因果的に規定する結果なのだと考える。この客観的指示に関する適切な理論を構成することができるという主張が新しい客観主義に基づく説明理論である。\_別紙参照

これは謂わば感覚データの独立性について論じる代わりに、客観的指示に関する理論を構成することによってそれに替えることができるとうする主張である。

ここでの微妙な論理は次のようなもの。

科学は現に進歩しているのだから、我々は世界のあり方にかんする真なる語り方に近づいているはずである。したがって、我々の言語を唯一の实在世界に結びつける何らかの写像関係があるはずである。ゆえに我々は实在論者であらねばならない。

すなわち、言語が実在する対象と我々から独立して客観的に存在するカテゴリー構造とに結びついていることを信じなければならない=専門的实在論

この立場からすると、真理の問題とは語(あるいは文)が個物(あるいは事物)を写像する仕方に関する問いだということになる。すなわち、言語が実在を写像しているかどうかは、人間がその個物(あるいは事物)を理解する仕方とは独立の問題だということである。

しかし、リチャード・ローティは次のように反論する。「対象を指示するためにこの対象を理解する場合、この理解が特定の意味ネットワークあるいは何らかの記述体系と既に結びついている、すなわち、世界がどのような対象からなっているのかという問いは、ある記述理論の内部でのみ意味をなす問いなのである。」

内部主義的(あるいはプラグマティスト的)見解に対する専門的实在論者の反論は次のようなもの。「真理の主張がテストされるのは共同体内部の基準によるが、真理と指示の対応関係は、理論から独立した何らかの観念がなければ客観的知識として成り立たず、科学の進歩もない。」

これに対してローティはさらに次のような反論を行う。「真理のテストと本性を区別するような違いはない。ある言明が真である否かを言明と指示カテゴリーとの対応関係によるが、それは常に世界についての我々の理解に相対的である。」

理解が我々を世界の内に位置づける仕方であるとすれば、世界の内で自分達が巧みに機能できるために十分な理解を実在にかんして所有しているという事実によってその相対性は保証される。つまり、実在に触れているという身体感覚こそ我々にとっての实在論なのだと考えられる。

#### 11. 实在論と知識の非客観主義的擁護

身体化された理解とは、我々が「世界内存在」としての理解を行うために、自らの身体から、したがって我々に作用する力やエネルギーから切り離されることがないという事実を言い表している。パットナムの内部的实在論とは上記の言明と同様の主張である。つまり、この实在論が概念図式に相対的な対象のみが存在することを認めるのであるから。

实在論と指示の関係の問題はサールのように単純に解消されるのではなく、身体化された経験における組織的活動の構造であるイメージ図式が、記号と知覚的入力との関係につ

いて、より満足のいく語り方をもたらしてくれるということを意味する。

我々は、外部の事物と有意味な相互作用を行うが、イメージ図式はその相互作用に不可欠な要素として創発する構造である。言い換えれば、イメージ図式は、我々を作用する力やエネルギーに関係される構造である。継続的な相互作用過程において我々はそうした力やエネルギーに出会うのであり、その過程が理解を構成するのである。したがって、我々がなし得ることは、この想像力の働きをさらに探求することである。

まず、人間がもつ理解という働きを探求するにあたってイメージ図式構造や想像力によるその隠喩的・換喩的投射が含まれることを指摘しておくべきであろう。

(1) 共有された理解とは、イメージ図式のような理解の身体化された構造も共有されていることを含意する。

(2) 有機体と環境は完全に独立した無関係な存在ではない。

(3) 我々の概念体系は二つの水準で経験の意味を構成するようにできている。

a) 基本的水準

b) イメージ図式的水準

(4) これら二つの水準が直接的に、また、自動的に我々の意味を構成するのであるが、それだけで理解のすべてが尽されるわけではない。より上位の概念や下位の概念が数多く必要とされる。そこで、隠喩、換喩といったメカニズムが用いられる。

## 12. 真理と客観性の非客観主義的説明

何が真であるかは、実在がどのように切り分けられるか、すなわち理解がどのように構造化されるかに左右される。理解の構造化は、有機体の本性、環境の本性と構造、我々自身の目的、概念体系、言語、隠喩的・換喩的投射、価値、正確さの基準等々、多くのものに依存する。これら関連し合った要因のすべてが一つに集まると、進行を継続し永遠に変化し続ける経験の複雑な構造ができあがる。

したがって、実在世界と対応する真理という観念は、記述の文脈内に位置づけられる限りにおいて依然として維持可能であり続ける。

客観性も同様に、整合性と適合性によって非客観主義的に説明できる。